

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520096

研究課題名(和文) もう一つの「分析革命」 精神分析と哲学の関係に関する思想的視座の構築

研究課題名(英文) Another "Analytical Revolution": Psychoanalysis in a Conceptual History of Analysis

研究代表者

原 和之 (HARA, Kazuyuki)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：00293118

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀末に登場した精神分析を、西洋における「分析(解析) analysis」概念の歴史に新たな段階を画するものとして位置づけた。古代ギリシャの幾何学と論理学において「分析」と呼ばれていた操作の検討から、その主要な三つの契機として「想定」「遡行」「分割」を指摘し、「分析」概念がさまざまな学問分野をこえて引き継がれてゆくなかで生じた変化を、これら三契機の構成する概念的布置の変容として記述した。最終的にはフロイトとラカンの精神分析が、「分割」に縮減された近代的な「分析」概念を超えて、「想定」を中心とした三契機からなる独自の「分析」概念を提示していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we aimed to determine the epoch-making place of psychoanalysis in the conceptual history of analysis in Europe. We first examined the operations called "analysis" in Geometry and Logic in Ancient Greece, so as to point out three major moments of "analytical" operation: supposition, regression and decomposition, and then described changes occurring in its conception as it was transposed in other disciplines (Algebra, Philosophy, Physics, Chemistry, Medicine, Psychiatry and Psychoanalysis) as a reconfiguration of these three moments. Finally, it was shown that Freudian and Lacanian Psychoanalysis articulated, beyond the modern conception of analysis reduced to decomposition, an original conceptual configuration of three analytical moments, with a particular focus on that of supposition.

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：精神分析 analysis (分析/解析) 概念史 フロイト ラカン 想定 遡行 分割

1. 研究開始当初の背景

(1) 「精神分析と哲学」：研究動向

精神分析と哲学をめぐる学際的研究については、近年国際的な組織化の動きが進みつつある。2008年にルーヴァンとパリで第一回会議を組織した「国際精神分析・哲学学会 (ISPP/SIPP)」は、2009年にはボストンで第二回会議、2010年にはブラジルで第三回会議が開催され、2011年にはパリで第四回会議が予定されているが、本研究の代表者はこの動向に積極的に関わってきた。また、広く人文科学との関係についても同様の動きを指摘することができ、2008年に台湾で行なわれた国際会議を機縁として、東アジア地域で精神分析と人文科学の学際研究を行なう研究者のための学会を準備する動きが進行中である。他方国内に眼を転ずれば、フロイトの新訳が複数の出版社から、それぞれことなつた方針に基づき刊行されるなど、精神分析に対して改めて、そしておそらくは従来とは異なつた視角から関心が寄せられつつあることを示す状況を見て取ることが出来る。精神分析と哲学の関係に関する限り、こうした一連の動きは、従来のように精神分析が哲学に対する外部ないしは異物として、革新的な視点をもたらすものとみなされていた段階から、精神分析の挑発ないし問題提起を受け止めて展開した哲学が、精神分析との間にこれまでとは異なつた関係を模索する段階に入ったことを示すものと考えられるだろう。臨床的な実践との接点は配慮されながらも、同時に人文科学的な関心の延長線上で精神分析が関心を持たれ、その文献が読まれるという状況が次第に一般化するなかで、哲学と精神分析の関係の再定義は喫緊の課題となっているということが出来るが、本研究はこうした近年の動向に、「分析」の概念史という観点から独自の貢献を果たそうとするものとして構想された。

(2) 着想に至つた経緯

本研究の代表者はもともとフランスの精神分析家ジャック・ラカンを対象とした研究をすすめてきたが、彼の思想が哲学への絶えざる参照のもとで展開されてきたことから、精神分析と哲学の関係に関心を持つようになった。その中で特に二十世紀における西欧思想の展開を「分析」概念を切り口に考察する研究を構想し、これについては2004年度-2006年度に科学研究費補助金を得て実施した若手研究(B)「二十世紀における「分析」の歴史：精神分析・現象学・分析哲学と言語の「存在」において一定の成果を得たが、そのなかで、こうした観点を二十世紀という枠を超えて、西洋思想史の全体に拡張することで、より明確に思想史の中での精神分析の位置を明らかにすることが出来るという見通しを得た。

(3) 研究の概念的枠組み

「分析」概念の二極：分割と想定

「分析 analysis」の概念は今日、主として要素的単位への分割という操作として理解されているが、こうした概念規定は、自然科学における「分析」概念を経て、アリストテレスの『分析論』にまで遡ることが出来る。しかしこうした「分析」概念の論理的規定は、同じく古代ギリシャに遡るもう一つの規定、すなわちエウクレイデスの幾何学における規定を参照しつつ形成されてきた。幾何学の証明や作図等の文脈でこの語が示していたのは、真であるかどうか分からない命題について、それが仮に真であったとしたときに生ずるさまざまな帰結のうち、証明の出発点となりうる既知の命題がないかどうかを探るという発見法的な操作であった。知をめぐりつつ「与えられていないものを、にもかかわらず与えられたとする」というこの操作を「想定」と呼ぶとするならば、「分割」と「想定」は西欧の「分析」概念の、二つの極を構成するものと考えられることができる。

作業仮説：分割から想定へ

この二極との関わりで構想されていた「分析」概念の変遷をめぐる当初の作業仮説は、「分割」から「想定」への移行という仮説であり、アリストテレスおよびデカルトの影響のもとで成立し、その後の複数の要因のもとで強化・確立された「分割」としての分析という規定の優位の中で、精神分析が「想定」としての分析を再浮上させた、とする仮説であった。(なお analysis は日本語で特に「解析」とよばれる数学の一分野をも指す。本研究では慣例に応じて「分析」と「解析」を使い分けつつも、analysis およびその派生語の訳語としては、基本的に「分析」の語を用いることとする)

本研究に先立って行ってきた予備的研究では、(a)古代ギリシャの幾何学および論理学およびその注釈における「分析」概念、(b)フランソワ・ヴィエトからデカルトにかけて、数学の一分野としての「分析[解析]」が登場した状況、(c)デカルトの「方法」と「分析」、(d)十九世紀の医学における「分析」概念、(e)二十世紀の精神分析、とりわけジャック・ラカンにおける「分析」の問い直し、について調査と考察に着手していた。

(e)に関してはかなりの蓄積があり、(b)についても一定の見通しが立っているが、(a)については論理的「分析」概念と「分割」を単純に同一視することを戒める指摘(P・タヌリ)もあることなどから、当初の仮説で想定した対立軸の歴史的生成過程を、資料に基づいていっそう慎重に検討することにした。

また(c)(d)に関連して、17世紀以降のいっそう広い範囲の学問分野における「分析」概念を調査・検討する必要が出てくることが予想された。とりわけ近代における「分割」としての分析という概念規定の確立の過程に

ついで、デカルト以降のフランス思想（ポール・ロワイヤル論理学、コンディヤック、観念学など）やライプニッツの思想のほか、精神分析における「想定」としての分析の回帰を条件づけている19世紀の諸学における「分析」概念のあり方の精査が欠かせない。この際、数学における「解析革命」（後述）や、医学における「分析」の概念に加えて、フロイトが精神分析を「分析」として位置づけた際に参照している化学（S・フロイト「精神分析療法の道」）におけるこの概念も詳細に検討する必要がある。また、この語が純粋な学問の文脈を越えて、ある種のフランス性や進歩思想と結び付けられてゆく過程についても、18世紀後半にドイツの数学界で生じた解析的方法と総合的方法の優劣をめぐる論争や、あるいはイギリスにおける「Analytical Society」周辺のいわゆる「Analyticals」の政治的側面などの具体的な事例を取り上げて検討することにした。

「解析革命 Analytical Revolution」とその反復

「解析革命 Analytical Revolution」という表現は数学史家カール・ポイヤールが、化学の領域でラヴォアジエがもたらした革新を「化学革命」と呼ぶ呼び方に倣って、19世紀のフランスにおける解析学の学問分野としての自立過程を呼んだ言い方である。この過程は、フランス革命後のフランスがおかれた政治・社会的な状況のなかで、とりわけ「解析[分析]」の名で呼ばれる学知の教育とそれが要請する体系化との関わりで進行したことが指摘されているが（Cf. 佐々木力『科学革命の歴史構造（上）』）、第二次世界大戦後のフランスにおける精神分析についても、精神分析の教育の必要から要請された体系化の結果新しい問題が提起されるという類似の状況が指摘できる。上記(e)の作業の延長線上で、こうした平行関係を明らかにしながら、フランスにおける精神分析における「想定」としての分析の復興を「もう一つの分析革命」として位置づけることが、本研究の最終的な目標となる。

2. 研究の目的

19世紀から20世紀にかけての世紀転換期にウィーンにおいて精神療法として登場した精神分析は、その後フランスに移入され、そこで哲学・思想の展開において非常に大きな役割を果たしてきたといわれている。

本研究ではその寄与を、19世紀フランスの数学界における「解析革命」に匹敵する「分析[解析] analysis」概念の革新、すなわち「もう一つの「分析革命 Analytical Revolution」」として位置づけつつ、その革新の内実を、ヨーロッパにおける「分析」概念の変遷のなかで位置づけることを通して、精神分析と哲学の関係に対する思想史的な視座を構築する。

より具体的には、「分析」概念を複数の契機からなる概念的布置として捉え直すことで、西欧思想史の連続性の中に精神分析を位置づけると共に、分析における「想定」という契機の強調を通して、精神分析と「科学」の関係を、両者が含意する「知をめがける実践」という観点から再規定し、そうした実践と社会との関係を考察する新しいパースペクティブを開くことを目指す。

3. 研究の方法

西洋思想史における「分析 analysis」概念について、図書館等に所蔵されている歴史的文献資料による調査およびそれに基づく考察を行った。調査と考察は（1）「分析」概念の二極の成立とその関係、（2）「分割」としての分析の優位の確立、（3）「想定」としての分析の回帰、の三つの段階に分けて進められた。調査にあたっては、国内の図書館の資料およびサービス等を最大限に利用したが、広範囲にわたって当時の文献を調査・参照する必要があることから、フランスを中心とした欧米圏の図書館において文献調査を行うとともに、現地の協力研究者と意見交換を行った。また調査資料の整理にあたっては電子化により作業の最大限の効率化を図るよう努めた。

4. 研究成果

「分析 analysis」の概念は、西洋思想史を通じて様々な時代の様々な学問分野において継承されるうちに、その対象領域と概念内容を大きく変えてゆく。本研究を通じて確認されたのはまず、そこで生ずる連続性と非連続性を記述するにあたり、これを「分析」概念を構成する複数の契機の布置の変容として捉えるアプローチ 本研究の作業仮説の含意していたアプローチ の有効性である。ただし具体的な事例を検討する中で、作業仮説で想定されていたよりもいっそう複雑な変容のプロセスを考える必要があることが明らかになってきた。

(1) 「分析」概念のギリシャ的布置：「想定」「遡行」「分割」

まず古代ギリシャの幾何学と論理学（およびその注釈）における「分析」概念について、われわれはそのそれぞれにおいて「想定」および「分割」としての「分析」という概念が成立したとする見通しから出発したわけだが、検討の過程でむしろ複数の契機の有機的な連関という側面が明らかになってきた。例えばエウクレイデスの幾何学において、その真理性が未だ与えられていない命題について、それが真であると「想定」とするという契機は、それが最終的に証明となる可能性のある論理的関係の「遡行」の出発点を構成する限りにおいて意味を持つ。またアリストテレ

ス論理学をめぐる議論において「分析」概念はしばしばその「分割」という側面を強調されて現れてくるが、特に複合三段論法や連鎖式をめぐるアリストテレスの議論を見てゆくと、要素への還元と全体性の解消と見える操作が、実際には可能な推論形式や明示されていない前提を「想定」しつつ「遡行」することで「全体的な相互関係の知解可能なパターン」を引きだそうとするものであることが明らかになる（P・バーン『アリストテレスにおける分析と学知』）。言い換えれば、幾何学において「想定」の契機が、論理学において「分割」の契機が際だっているのは間違いないとしても、「分析」概念が「幾何学」から「論理学」へと受け渡された時に生じたのは、単純な移行ではなく概念的諸契機の布置の組み替えである。そしてアリストテレスの論理学は、単に「分割」としての「分析」という考え方を示したというよりも、むしろ初めて「分析」概念をその本来の広がりにおいて、すなわち「想定」「遡行」「分割」の三契機の構成する布置として提示したものととして評価する必要がある。

(2) 「分析」概念の移転と変容

ヴィエト

さらに「分析」概念が異なった分野に導入されて大きくその姿を変える事例として、本研究では次いでフランソワ・ヴィエトとデカルトに注目した。ヴィエトは、未知の数量を文字で表した上で式を立てて解く代数的な操作を「分析」と呼ぶことを提案する。命題の真理性が数量かという違いこそあれ、「与えられていないものを、にもかわらず与えられたとする」という操作、すなわち「想定」の契機の共通がこの提案を支えているわけだが、アリストテレス以来の学問的区分連続量の学問(幾何学)と非連続量の学問(算術)を乗り越える形で行われたこうした「分析」概念の移転は、この概念そのものの大きな変容を導くことになる。まず指摘できるのは、この分野における「分析」が、「総合」すなわち発見された論理的関係の検証であり実質的な証明にあたる操作との補完的關係から解放され、それ自体完結した探究の手法として位置づけられるようになったという点である。しかし更に重要なのは、ヴィエトの構想が個別の問題の計算(logistica numerosa)を離れ、式の形に注目する計算の一般化(logistica speciosa)の次元を視野におさめていた点である。「分析」概念のギリシャ的起源においては、こうした一般化はむしろ論理的な「分割」の契機に属していたわけだが、それがヴィエトにおいては、「想定」を出発点として可能になった(問題の)分節的表現と直接に結びつく。そこで成立している「想定」と「分割」の結び目は、アリストテレス論理学において成立していたそれとは大きく異なっているのである。

デカルト

さてこうして新たな文脈に挿入された「分析」概念のちに「盗まれた手紙」のデュパンが非難した、フランス人による「知的詐欺」が指しているのがこれであるとの関わりで、デカルトがもたらした貢献は二つある。

第一の貢献は「分析」と「幾何学」の関係の更新である。伝統的な代数では、累乗を「平方 quadratus」や「立方 cubus」と呼ぶなど、代数的表現を幾何学的に理解する考え方がヴィエトを含めて残っていたのに対し(いわゆる略号代数)、デカルトは記号化を進めることで代数から幾何学への古い形の参照を断ち切った上で(記号代数)、代数的表現と図形の間新たな関係を打ち立てた。すなわち幾何学の確定問題に代数を応用し、そこで用いられる方程式の次数と解決に必要な幾何学的手法との間に一定の関係があることを示したが、これは一般に問題が与えられたときに、これを代数的な表現に書き直した上で解く、いわゆる解析的アプローチ(この場合はいわゆる「解析幾何学」)の嚆矢となった。そしてこのアプローチの延長線上に、近代科学を特徴付ける、物理世界の数理的記述の試みの道が拓かれることになるだろう。

そして第二の貢献は、かつて幾何学において利用され、そして彼の同時代に算術において利用されつつあった「分析」を参照しながら彼が練り上げたいわゆる「方法」であり、われわれはこれを哲学の分野に移転された「分析」概念と見なすことができる。そこでは「想定」と「分割」の二契機が、幾何学、論理学および算術の領域における既存の「分析」とは異なった、独自の仕方で結び目を構成しているのが見られるのである。『精神指導の規則』で問題の「方法」はまず「分割」によって始められるが、特徴的なのはそれが人間の知性の有限性によって正当化されているという点である。さらに注目すべきは、ここで既知と未知の区別が明示的に問題化されているという点である。『規則』では未知であるものが、既知であるものによって何らかの仕方で表示されて規定されている必要があるという点が強調されていたが、これは数学の議論では必ずしも表に現れてこない、問題の新しい次元を示している。すなわちここで「分割」は、「未知」を「既知」から分割するという課題を引き受けることになるのであって、この延長線上に『方法序説』のコギトは位置づけることができるだろう。

(3) デカルト以後の「分析」概念

「分割」の優位の確立

デカルトの「方法」までは「分析」における「想定」の契機は明確に現れている。ところがその後この契機は背景に退き、かわって「分割」の契機が前面に押し出されてくる。そしてこの「分割」の優位は、現在に至るまで「分析」概念を規定し続けることになる(この優位は「analysis」の日本語訳として「分析」が採用されていることによって、日本語

話者が常に意識することを余儀なくされていることでもある)。この「分割」のヘゲモニーの成立は、「分析」概念の歴史の大きな問題の一つであるが、これには自然科学(経験の「分解」と世界の「解剖」を標榜するベーコン的科学的)の影響を考える立場がある。たしかにフロイトが精神分析の分析性を論じる中で、その「分割」という要素を強調するにあたって参照していたのは化学であり、それが「分析」の近代的な概念規定に果たした役割は大きい。しかし同じ自然科学の中でも、たとえばニュートンの光学で見られるような「分析」概念では「分割」の契機は必ずしも強調されておらず、自然科学の内部での「分析」概念の展開を考える必要がある。またそこで数学の「解析」的アプローチが果たした役割も重要になってくると考えられるが、今回研究ではこの部分が十分に展開できず継続的な研究が必要な部分となっている。

更に考慮すべきもう一つの要因は、人文諸学のなかでの「分析」概念であり、とりわけ哲学における「分析」の理解である。フーコーが古典主義時代の哲学を「分析の哲学」と呼んでいるとおり、この時代の哲学では「分析」が中心的な位置を占めているが、コンディヤックやルソー、百科全書派の「分析」概念を検討してゆくと、そこでは「分析」と「遊行」の契機が強調されている一方で、「想定」の契機は幾何学の歴史といった特定の文脈以外ではほとんど言及されることがない。ただアリストテレス論理学で見たように、この「想定」の契機は、しばしば「分割」と「遊行」の過程を支えあるいは導く役割を果たしている。古典主義時代における、ある意味で一面的な「分析」概念の隆盛の影で、隠れた「想定」の契機があるのではないか。こうした問題意識から、とくに(その事実性がしばしば問題化される)「起源」をめぐる議論のほか、虚構や文学的想像力との関係も念頭に、同時代の文学作品(いわゆる roman d'analyse など)も含めて検討を行った。

対象に繰り込まれた「分析」

さらにデカルト以後の「分析」概念について注目したのは、「分析」の対象領域の変遷である。この変遷をわれわれは、分析対象の人間化とその帰結としての対象への分析の繰り込みとして捉えようとした。デカルトの解析幾何学が、世界の数学的記述への第一歩であったとすれば、その歩みは更に数理物理学の分野で大きな展開を見た。はじめ人間の手の入らない自然である天文現象に向けられていたその眼差しは、やがて地上に引き戻され、人間が実験的に自らの手で作り出した自然に向かうようになる。さらに18世紀の終わりから19世紀にかけての時期に、解析的手法の政治的決定(コンドルセ)や社会の諸現象(ラプラス)への応用が行われるようになるにつれて、人間自身が分析の対象領域に入ってくる。そしてこの、分析の対象領域の拡張と軌を一にした分析対象の人間化の

最終的な帰結を示しているのが、19世紀のフランス医学である。フーコーは『臨床医学の誕生』において、医学がコンディヤックと観念学の伝統に拠りつつ「分析」的な手法を応用しながら展開されていたこと(ピネル)を示す一方で、X・ビシャの解剖学について、それが単に分析の客観的応用であるのみならず、分析を病理的過程の本質的契機にするものであった、と指摘する。フーコーによれば、「病が分析するべきものであるのは、病がそれ自体分析であるからである」。病が、そしてなにより死が、「偉大な分析者」として身体を解体しようとするものであるからこそ、その解明の手段としては分析こそがふさわしい、というわけだ。この分析の再帰的適用「分析の分析」は、それが分割を分析の本質的な契機としていると同時に、分析対象の人間化の極点としての人間存在の分析化を実現している限りにおいて、デカルト以後の「分析」概念の歴史のリミットを構成するものと言える。

(4)もう一つの「分析革命」としての精神分析

フロイト：「想定」の復権による「分析」の三契機の回復

フロイトが、ヒステリーの治療法として自らの提唱する操作を「分析」と呼んだとき、初め彼はこれを(トラウマ的な回想への)「遊行」の意味で理解しつつ用いていた。ところが中期の論文で精神分析の分析性に言及するとき、彼が強調するのは(欲動への)「分割」の契機である。しかしこれは彼の「分析」概念が変容したというよりもむしろ、彼の考える操作のうち、「抵抗」の顕在化前後の二つの局面が主題化されていると考えるべきである。さらにこの二つの局面のそれぞれに、分析の三契機が繰り返して現れる。精神分析は夢や症状の「分割」された一片から始まる。そこから展開される自由連想はやがて過去の出来事への「遊行」という性格を持つようになるが、それが停滞したときに、分析家の「想定」が介入する。何かが想起されているはずだ、というこの想定の方に開示されるのが、固有の意味での無意識にあたるわけだが、分析の中ではこれがうまく機能しない場面が出てくる。このいわゆる「抵抗」の分析では、フロイトによれば様々な症状やファンタズムがその背後にある欲動へと「分割」されなくてはならない。そしてそれらの欲動が発達の一定の段階にその座を持っていることが主体に認められることにより、この「分割」は「遊行」となる。さらにそこで明らかになる、主体が外界ないし他者との間に取り結ぶ、リビドーないしイマージョを介した関係は、「想定」の契機に対応する。こうしてフロイトは、「分割」「遊行」「想定」が異なった深度で、異なった主体によって繰り返されるプロセスとして「分析」を再定義したのである。

ラカン：「想定」としての分析と人間の分

析的存在

博士論文で精神医学の基礎づけを目指す中で、ラカンは人間の心を対象としてそれに関する知を得ようとする際に、人間が欲望する存在であると「想定」することが最低限必要であるという洞察を得た(欲望の「公準」)。知をさがしてなされる想定、というこの操作はすぐれて「分析」的な契機であるが、ラカンはこの契機が患者の妄想形成の側にも見られることを指摘している。ラカン思想の展開は或る意味で、ここで確認されながら十分展開されることのなかった学知と妄想の「分析的」構造の平行関係から、そのあらゆる帰結を導き出すという点に存している。

主体の他者に対する関係におけるイメージの媒介の重要性を確認した戦前の議論を経て、戦後フランスの精神分析界で重要な役割を演ずることになったラカンだが、彼の置かれた状況には、解析学における「解析革命 Analytical Revolution」との間の一定の平行関係を認めることができる。すなわち社会的な大変動の後に、次世代の教育の必要に迫られ、新たに教育を組織すると同時に理論の見直しを進めた結果、その一貫性の外部にこぼれ出る新たな問題の次元が明らかになる、というプロセスがここにも見いだされるのである。

理論的な見直しにおけるブレークスルーとなったのは、分析の対象への繰り込みである。知る主体としての精神科医に対する知られる対象としての患者といった精神医学的な枠組を離れて、ラカンはすでに、分析家にとっても分析主体においても知ということが問題になるような精神分析の構図の中に身を置いていたわけだが、彼は更に分析主体の側に想定されるエディプス的な発達過程を、欲望の想定ないし「公準」を出発点とする他者との関係すなわち「欲望の弁証法」として再定式化することで、上述の繰り込みを実現する。こうして人間存在の根幹に、他者との想像的な紐帯をその最外延で支える「想定」としての「分析」が組み込まれるのと相関して、そうした分析とは区別されるべき精神分析固有の「分析」が問題になる。精神分析家は「想定」するだけでなく「分割」し「遡行」しなくてはならない。他者の欲望を「想定」するとはすなわち他者のもとに欲望を欲望するということであり、その限りで一つの(愛の)要求を構成するが、上述の「分割」はそこで結ばれる主体と他者の関係において生じなくてはならない(フロイトのいう分析の原則としての「欲求不満 Versagung」、ラカンのいう「知っている」と想定された主体の失墜」あるいはより一般的に「分離」)。またその「分割」はある種の「遡行」と相伴って進むが、この「遡行」は時系列あるいは因果の系列ではなく、構造の系列のなかで生ずるはずのものである。こうして成立したラカンの精神分析における「分析」概念は、フロイトのそれと並んで、その近代的な縮減を免

れながら、古代ギリシヤ的な布置に回収されることもない、独自の概念的布置を構成しているということができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

原和之, 「分析」とは何の謂いか 「分析」概念の歴史におけるフロイト, 東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻紀要『Odysseus』第18号, 2014年3月 pp. 83-113, 査読無し.

〔学会発表〕(計 3 件)

Kazuyuki HARA, "D'un préalable à toute transformation possible de la subjectivité", "Souffrance, jouissance, guérison", le 4e Congrès de la Société Internationale de Psychanalyse et Philosophie (5-7 décembre 2011), Université Paris-Diderot. ほか2件

〔図書〕(計 1 件)

(分担執筆) Kazuyuki HARA, "D'un préalable à toute transformation possible de la subjectivité", in Coelen, Marcus, Nioche, Claire et Santos, Beatrix (éd.), *Jouissance et souffrance*, Campagne Première, Paris, janvier 2013, pp. 119-139, 査読無し.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原 和之 (HARA, Kazuyuki)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 00293118

以上